

私との子を授かれれば殿下は側室を持てるので
妊娠したフリをしたら、溺愛されていたこと
を知りました

この幸せな結婚生活は、終わりに向かって動き始めている。

それなのに私は未練がましく、今日も夫の瞳と同じ青色のドレスを身にまとってしまった。

鏡に映る私の胸元は、美しい金のネックレスで彩られている。中央で大粒のブルーサファイアが光るこのネックレスは、一年前に結婚した夫、ラッドレン王太子殿下が、私の誕生日にプレゼントしてくれたものだ。

（殿下がアールガード辺境伯の領地へ発つてから、もう半月が過ぎたのね……）

愛しい人に会えない寂しさで気分が沈む。ドレッサーチェアに座ったままほんの少しだけ目線を下げると、私の髪を梳かしていた侍女のベルマリーの手が止まった。

「いかがなさいましたか、ミーネ様」

気遣うような声が聞こえてきて視線を正面へ戻すと、私の後ろで櫛を手にして立つベルマリーが鏡越しに心配そうな表情でこちらを見ていた。

色白な私と違って健康的な肌の色のベルマリーは、王太子妃の専属侍女として動きやすいように軽めの素材で作ったダークグリーンのドレスを着ていて、オレンジ色の髪をふたつに分けてきつち

りと編みこんでいる。

普段は明るい彼女を少しでも安心させたくて、ベルマリーへ鏡越しに笑みを向けた。

「なんでもないわ」

微笑みを保ったまま、私は鏡に映る自分の姿を見つめた。

胸まで伸びた髪は癖が強い^{くま}ため、梳か^としても巻いたようにうねっているが、だいぶ落ちてきている。わずかな風でさらりとなびくラッドレン殿下の髪と違って手入れが大変だけれど、ベルマリーのおかげで絡むことはないだろう。

「髪を梳か^としてくれてありがとう、ベルマリー。ボサボサな髪だったのに別人のようだわ」

「可愛らしいミーネ様をさらに可愛くするのが、私の生きがいですから」

髪も瞳もくすんだ亜麻色で地味な私のことを、同い年のベルマリーは頻繁に可愛いと言ってくれる。彼女はお世辞を言わないため、それが本心だと分かるが、その可愛いは王城の庭へ気まぐれに現れるリスやウサギのような小動物を見つけた時の感想と同じ意味合いだろう。

そう思ってしまうのは、小さい頃に幼馴染^{おきななじみ}のネイブルから「ミーネは目が大きくて髪がふわふわだし、リスみたいだ」と言われたせいだろうか。

改めて鏡に映る自分の姿を見つめた。

童顔なのに胸だけは一般的なサイズよりも大きく育ってしまい、幼い顔と成熟した胸で調和がとれておらず、不恰好に見えるのがつらい。

心の中のため息を吐くと、私を励ますようなベルマリーの明るい声が聞こえてきた。

「今日は午前中に公務と語学のレッスンがありますが、午後は何もないのでゆっくり過ごせますよ」

「確か午後は、式典への出席とダンスのレッスンがあつたはずだけど……」

先週は先生のご都合で休みになったが、今週は特にそのような話はなかったから、通常通りレッスンがあるものだと思っていた。

「タジェロン様が予定を変更してくださいました」

王立学園時代の同級生で、現在は第一宰相補佐を務めているタジェロン様は、王太子と王太子妃のスケジュール管理を任されている。

今日の予定がほとんど入っていないということは、おそらくタジェロン様も私の妊娠の噂を聞いて体調を気遣ってくださったのだろう。

数日前から、私が妊娠しているという噂が王宮内で囁かれ始めた。

だから明後日の夕方、ラッドレン殿下が視察から帰ってきたら、幸せな結婚生活が終わってしまう。

私が子を授かれれば、殿下は側室として、本当に愛する人を迎えることができるのだから――

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その日の夜。音に気づいて、読んでいた本から顔をあげた。

(雷……?)

くつろげるように配慮された心地よい空間でありながら、宮殿としての上品さと重厚感も備えている寝室内に再び音が響く。天蓋付きの大きなベッドの上で、クッションに寄りかかって本を読んでいた私の所まで雷鳴が聞こえてきた。

(アールガード領のあたりは大丈夫かしら……)

本を閉じ、少し離れた窓のほうへ視線を向け、辺境の地にいる愛しい人へ想いを馳^はせる。その時だった。

窓とは違う方向から、ガチャ、と扉の開く音が聞こえた。思わず息を呑む。

こんな夜遅くに寝室へ入ってくる人なんていないはず……恐ろしくて振り返ることができない。

「ミーネが妊娠したと聞いたのだが」

なぜか、ここにいるはずのない人の声が聞こえた。いや、この部屋は夫婦の寝室だから、いてもおかしくない人ではある。

でも彼は一度もこの部屋で寝たことがなく、寝る時はいつも隣にある自分の部屋のベッドを使う。それに帰ってくるのは明後日の夕方頃だと聞いていた。

「どうということかな、ミーネ？」

確かに彼の声のはずなのに、いつもの穏やかな雰囲気とは違う。少し低く、怒気を含んでいるような聞いたことのない声色で怖い。

おそろおそろ声のしたほうへ顔を向ける。

夫婦の寝室と王太子殿下の部屋を直接つなぐ扉が開いた所に、その声の持ち主——フレイツファルジュ王国の王太子、ラッドレン殿下が立っていた。

優秀で穏やかな性格の優しい殿下は国民に慕われており、特に若い女性たちからの絶大な人気を誇っている。美を司^{つかさど}る天使たちが輝く太陽と澄み切った青い空を素材にして丁寧に作り上げたかのような美しい金髪碧眼の容貌^{ようぼう}は、王族に相応^{ふさわ}しく気品のある顔立ちで非の打ち所がない。

政治的手腕だけでなく剣の腕前にも優れ、外見も内面も素晴らしい殿下は、私と結婚した今もお無意識に周りの令嬢たちを虜^{とりこ}にしてしまう。

そんな普段は柔らかな優しい表情の彼が、痛みに耐えるように黒い外套の胸元をギュッと掴み、苦しげに眉根を寄せていた。

「まさか誰かに、無理やり……？ ミーネ、相手は分かるか？」

周囲は皆、私のお腹には殿下の子どもがいると思っ^{おも}て疑わ^{うたが}ないけれど、それは違う。

殿下と結婚して一年、私たちは聞^{きか}に共^{とも}にしたことがない。結婚初夜の時さえも。

だから殿下は、自分の子が私のお腹にいないことを知^しっている。

私たちに身体の関係がないのは仕方ないことだと思^{おも}う。

この国の王太子である殿下と公爵令嬢の私は、政略で結ばれた仲にすぎない。殿下は私のことを妻として愛せないから、私の身体に触れようとし^しないのだ。この事態が夫婦にとつて危機的な状況だということは、自分でも分かっている。

貴族が十二歳から通う王立学園へ入学する前の年に、殿下と私の婚約が決まった。殿下は学園で

一緒だった頃から親切にしてくださり、十八歳で学園を卒業した翌月に結婚したあとも、その優しさは変わらない。殿下のおかげで毎日幸せに過ごせていたため、殿下が心から愛する人について考えが及ぶのに丸一年かかってしまった。

「……ああ、すまない。思い出させるように嫌なことを聞いて。答えなくていい」

彼はそう言うが、思い出すような嫌なことは何もなければ、答えることができない。そもそも妊娠に至るような行為をしたこともない。

そんな私の妊娠の噂が、なぜ広がったのか。

話は半月前に遡る。

結婚したあとも手を出されず思い悩んでいた私は、ようやく思い至った。

結婚して三年経つても妻が妊娠しなければ、王家の血を残すために王太子は側室を持つことができる。殿下は愛する人のためにその時を待っているのだ、と。

想いを寄せる女性と結ばれないという我慢を強いられながら、政略結婚の相手である私へ優しくしてくださる殿下に、あと二年も待たせるなんて申し訳ない。

この国では性行為による母体の負担を減らすため、妃に妊娠の兆候がある場合でも特例で側室を持つことが許可されている。フレイツファルジュ王国十四代目ジラヴィッド王の治世に制定されたこの特例は、今も有効だった。

ゆえに、妃の私に妊娠の兆しがあれば、殿下は堂々と愛する人を側室に迎えることができる。

だから私は、殿下がアールガード辺境伯の領地へ視察に行っている半月の間、専属侍女のベルマ

リーに協力してもらって妊娠したフリを始めた。

みんなが信じてくれるか分からず、側室を持てるとぬか喜びさせたくなくて、殿下には事前に説明をしていない。うまく噂が広まったら、殿下が視察から戻った時に事情を話そうと思っていた。

「俺のほうで調べるよ。ミーネにつらい思いをさせた奴には必ずそれ相応の罰を与えるから、安心して」

学園に通っていた頃から、殿下はいついかなる時も正義感に満ちていた。このままでは私を孕ませた犯人を捜し続けてしまうに違いない。

絶対に捜せないのに。

まさかこんな寝る直前に、殿下とこの話をする事になるとは思わなかったけれど、明後日の夜に話そうと考えていたことから、少し早くなったに過ぎない。

「ち、違います、殿下。無理やりではありませんん！」

私がそう言うと、殿下の眉が片方ほんのかすかにピク、と動いたような気がした。

「無理やり、では、ない……？」

後ろ手に扉を閉めた殿下の様子に、違和感を覚える。

いつもの爽やかな雰囲気ではなく、黒いオーラをまとっているように見えるのは気のせいだろうか。

「ではミーネ、お腹の子は誰の子だ？」

外套と上着を脱ぎ捨て、首に結んでいた亜麻色のスカーフを片手で緩めながら、殿下が私のいる

ベッドのほうへ近づいてきた。

先ほどまでは聞こえなかった雨音が聞こえてくる。

いつの間にか、雷鳴だけではなく、窓を打つ雨の音も激しくなっていた。

「相手は誰なんだ、ミーネ」

「言え、ません……」

相手なんていない、存在しない人の名は言えない。

「そいつを庇うのか？」

ギシ、と音を立てて殿下がベッドに膝をのせた。突然のことに驚いて、私は持っていた本を落としてしまった。

獣のように獐^{どう}猛な視線を向けながらベッドへ上がってきた殿下が、すぐそこにいる。

夫婦だからひとつのベッドにふたりでいるのは普通のことかもしれない。だけど私たち夫婦にとっては、初めての出来事。

殿下の指先が、ブランケットの上から私のつま先に触れた。

頭の中で警鐘が鳴り響く。

逃げなきゃ、と思った。

どうしてかは分からないけど、本能が危険だと知らせてくる。

ベッドから降りようと身を翻すと、殿下に後ろから抱きしめられた。

夜会でダンスを踊る時などに、お互いの距離がゆつくりと正面から近づいて触れ合ったことは今

までに何度もある。でもこんな風に、背後から抱きしめられて殿下の体温を背中に感じたのは初めてで、どうすればいいのかわからない。何か言おうと口を開いても言葉が見つからなかった。

「随分とその男に惚れているんだな」

いつもより低い声でそう告げた殿下がベッドの中央で腰をおろす。鍛え上げた^{たくま}逞しい腕に捕らえられている私は、彼の脚の間に閉じこめられてしまった。

後ろから抱きしめられたままだから背中がとても熱い。それに心臓が大きな音を立て始めた。呼吸の仕方を忘れてしまったみたい息ができない。自分の身体なのにどうすることもできずに困惑している私の耳元で、殿下は息を吹きこむようにして、そつと囁^{ささや}いた。

「……ミーネ」

いきなり与えられた甘い声の刺激に驚いて、反射的にヒュツと息を吸う。すると柑橘系の爽やかな匂いがふわりと鼻をくすぐった。

これは王室御用^{ごようたし}達のフォトウエル商会で扱う品の中から、殿下と一緒に選んだ香水の香りだ。私の香水よりも甘さを抑えているけれど、ベースは私と同じものを使っている。

お揃いだね、と殿下に甘い微笑みを向けられて胸が切なくなってきた日のことを不意に思い出した。

これ以上こうしていたら殿下のことばかり考えて、好きだという気持ちが言葉になってあふれ出てしまいそう。そんな私の身勝手な想いをさらけ出したら殿下を困らせてしまう。

「で、殿下、放してください」

殿下の息にくすぐられている右耳から意識を逸らすために視線を左へ向けると、寝室に飾られた

アマリスの鉢植えが見えた。いつも美しい姿で目を楽しませてくれる赤い花が、なぜか今は滲んで見える。漏れないように抑えている想いが、なんとしても外へ出たいと涙になり、私の瞳を潤ませてるように思えた。

「俺にこうされるのは嫌？ 前にネイブルにはさせていたのに……そうか、相手はネイブル？」前に、ネイブルにはさせていた……？

もしかしたら殿下は、護身術を習っていた時のことを言っているのだろうか。

殿下と同年で十一歳の時に婚約が決まった私は、いざという時に自分が盾となって殿下を守ることができるようにならなくて、騎士団長の息子で幼馴染のネイブルに護身術を習ったことがある。貴族が十二歳から通う王立学園へ入学してすぐの頃、たった一度だけ。

偶然その場を通りかかった殿下に、「いざという時は婚約者の俺がミーネを守る。ネイブルが教える必要はない」と言われた。殿下は責任感が強いから、何かあったら自分が婚約者を守らなければならぬと思ったのだろう。その言葉に甘えてしまうのは心苦しかったけれど、それ以降、私はネイブルに護身術を習っていない。

そしてその日から、殿下は騎士団の訓練へ参加するようになり、学園を卒業する十八歳になる頃には、将来の騎士団長候補と噂されているネイブルに引けを取らないくらいの腕前になっていた。共に鍛錬に励んでいた殿下とネイブルは、今も良きライバルで親友でもある。

殿下にとって大切な友人のネイブルが王太子妃に手を出したなんて思われたら、殿下にもネイブルにも申し訳ない。

「それは違……ん」

違います、と否定しようとしたのに、クイツと顔の向きが変わり、殿下の唇に口を塞がれていた。

「ん……」

殿下とキスをしたのは、これが二度目。

一度目は結婚式の時で、それ以来ずっとキスなんてしていない。

結婚式の時は向かい合わせに立った殿下がそつと私の肩に触れ、唇同士がチュツと軽く重なるだけの口づけだった。

幸せすぎてドキドキしたから長く感じたけど、実際にはほんの一瞬の出来事だったはず。

でも今しているキスは、違う。

殿下に後ろから抱きしめられ、私は殿下のほうへ顔を向かされて唇を奪われている。

お互いの口が触れてから、どのくらい時間が過ぎているのか分からない。唇の感触を教えこまれるように長いキスが続き、脳へ次々と刺激的な情報が届けられるのを、何も理解できないまま混乱した。

空気を求めて顔を動かそうとしたが、私の後頭部に殿下の手が回り、動きを封じられてしまう。頭の中が蕩けそうなくらい熱く、口はずつと塞がれたままで苦しい。

息ができなくて、もう、限界……。そう思った時に、ようやく殿下の唇が離れた。

ふはっ、と息をして新鮮な空気を取りこむ。翻弄されて他へ注意を払う余裕がなかったせいか、窓を叩いていた雨音が今は聞こえなくなっていた。

「ミーネ……」

私の左頬を優しく撫でながら、殿下が切なそうに眉根を寄せている。愁い^{うれ}を帯びた殿下の表情は心をかき乱すくらい猛烈な色気を醸し出していて、私は返事もできずに見入ってしまった。

「本当は、幼馴染^{おとななじみ}のネイブルと結婚したかったのか？」

「そ、ん……」

そんなことはありません、と言おうとした私の唇に殿下の右手が触れて、告げようとしていた言葉をとっさに呑みこむ。何も言えなくなった私へ向けられた殿下の声は、心なしか少し掠れていた。「その返事は、今は聞きたくない。だが今後のために、ふたりでいる時のネイブルがどんな感じでミーネに接していたのか教えてくれ。俺が知らなくてミーネだけが知っているネイブルの一面があるだろう？」

どんな、感じ……？

幼馴染^{おとななじみ}だったネイブルと、小さな頃はよく一緒に遊んでたたび喧嘩もした。室内で私が遊びたい時も、外で遊ぼうと強引に連れ回されることが多かったと思う。

さすがに大きくなってからは一緒に遊ぶこともなくなり、喧嘩なんて一度もしていないけれど、小さな頃の印象は強く記憶に残っている。

「正直に答えて、ミーネ」

「……ネイブルは……少し強引なところがありました……」

「ふうん……少し強引な、ね……」

私の左頬を撫でながら殿下がにっこりと微笑んだ。見惚れてしまうくらい美しい笑顔だけど、なぜか笑っているように見えない。

「では俺も、そんな男になるうか」

左頬から離れた手で後頭部を支えるのと同時に与えられた殿下の唇の感触に、思わず目を瞑る。まさか今日だけで、二回もキスすることになるなんて思わなかった。

「んッ！」

口内にヌルリと侵入してきた存在に驚愕して、反射的に目を見開く。

すると目の前に瞼^{まぶた}を閉じた殿下の長い睫毛があった。その近さに心臓が飛び出そうになり、慌てて目を閉じる。

「んン!?」

湿っていて生温かい不思議な感触が私の舌に絡まってきた。口の中で舌を擦られているけれど、触れられていないはずの背中が、柔らかな羽根で撫でられているみたいにくすぐったい。

「……むう……ん……んンッ」

舌を吸われた途端、身体の内側に手を入れられて背骨までくすぐられたのかと思うくらいゾクゾクした。寒くないのに震えが止まらない。

未知の感覚ばかりで不安になり、おそろおそろ瞼^{まぶた}を開けてみたら殿下と目が合った。口づけをしているのだと改めて自覚し、私を甘く刺激し続けているのは殿下の舌だったと気づく。

瞳しか見えなくても、殿下がわずかに目を細めて嬉しそうに微笑んだのが分かった。人を魅了す

る笑みを至近距離で向けられて、危険を感じた私はすぐに目を瞑る。轟惑的^{こわく}すぎる刺激に耐えきれず、心臓が壊れてしまいそうで怖かった。

でも目を閉じたのは失敗だったかもしれない。口内を這う殿下の舌の動きを、余すところなく感じとってしまったから。

（キスって、こんなに、すごいものの……？）

口から遠いはずの下腹部が、なぜかズクリと疼く。その感覚に戸惑い、逃れたいと身体を動かすと、放さないと言わんばかりに強く抱きしめられた。より深く挿しこまれた殿下の舌先が舌の根元を擦ったかと思えば、舌を何度も絡めてきて解放してもらえない。時間をかけて私の舌を存分に舐^なると満足したのか、殿下の舌はようやく遠ざかっていった。

「ミーネはこんな風に強引にされるのが好きなのか、ネイブルがするみたいに」

「ネイブルと……キスなんて、したこと……ありません……」

激しく動いたわけではないのに身体が熱くて呼吸も乱れている。正しく息をするにはどうすればよいのか分からず、浅い呼吸しかできない。

「……では今ミーネが付き合っている男は、いったい誰なんだ？」

私を見つめたまま殿下は眉根をグツと寄せ、「教えてくれ」と低い声で呟いた。

「っ、いない、です……」

「いない……？　そうか……今はもう、いない……」

殿下の大きな手がゆつくりと私の頭に触れ、慈しむように撫で始めた。

そんな風にされたら、厳しい王太子妃教育がつらくて落ちこんでいた時に、殿下が私の頭を優しく撫でながら慰めてくれた日のことを思い出してしまう。涙が出そうになり、鼻の奥がツンと痛くなった。

「ミーネは……子どもを産みたいと思っているのか？」

「……産みたい、です」

殿下との子ども……いつか授かることができるのなら、もちろん産みたい。

「それなら……ミーネと子どもは俺が全力で守るから……産まれてくる子は俺たちの子として育てさせてくれ」

意外な言葉に驚いて目を大きく見開いてしまった。

殿下は私のお腹にそっと手のひらをあてている。そして落ち着いた声で私に告げた。

「別れたあとも心を奪われたままで、その男の子どもを産みたいと思っているんだろう？　でも、お腹の子に罪はないから」

その言葉を聞いて、殿下が第三宰相のキラエイ公爵を諫めていた時のことを思い出す。

あの時、宰相会議でキラエイ公爵は、罪を犯して収監されている親から生まれた子どもが多く暮らしている孤児院への寄付を減らすように主張し、それに対して殿下は子どもたちに罪はないから寄付を減らす必要はないと述べていた。

キラエイ公爵は平民への教育予算なんて不要だとたびたび訴えている。それに対して第二宰相のケンバート公爵——私の父は、貴族の子どもが通う学園と同じくらい平民の子どもが教育を受ける

ための学び舎が大切だと考えていて、キラエイ公爵とは意見が対立することが多かった。

昔は平民の子どもが学べる場所はなかったらしい。教育関連部門の統括を第二宰相の父が担当するようになり、身分にかかわらず教育の門戸が開かれるように改革したのだと第一宰相のチェスター公爵……タジェロン様のお父様から聞いている。

一年前に『ある事件』が起こり、父が教育関連部門の役職を外れてからは、キラエイ公爵を支持する者が増えて少し状況が変わってきってしまったけれど……

私の父と同じように、殿下は今も変わらず身分に関係なく教育を受けられることの大切さを日頃から提言している。そんな殿下は、私の子にも平等に教育の機会を与え、もしその子に才があれば適した道へ進めるように力を尽くすに違いない。

「ミーネと子どもが好奇の目で見られないように、生まれてくる子が相手ではなくミーネに似ていてくれるといいのだが……」

「……お腹に子どもは、いません……」

私の言葉を聞いた殿下が、小さく息を呑んだ。

「お腹に子はいない……？」

「……はい……」

殿下は私のお腹のほうへ、ゆっくりと視線を落としていく。

「そうか……」

「ご心配をおかけして申し訳ございません」

「妊娠が残念なことになったのだから、身体だけでなく心もつらかっただろう。そんな時に一緒にいらなくて、すまなかった」

殿下はお腹に子どもがいなのは私が流産したからだと考えたようで、何よりもまず真つ先に私のことを氣遣つてくれた。罪悪感で胸が痛い。

「ち、違います、殿下。最初から、お腹に子どもはいません」

「最初、から……？」

私の肩に手を置いた殿下が訝しむような表情をしている。

後ろめたくて殿下の視線から逃れるように顔を背けると、再びアマリスの鉢植えが視界に入った。良心の呵責に苛まれていたのか、まっすぐに伸びた茎の先端で貴婦人みたいに凜と咲く立派な赤い花から、ありのままに告げなさいと言われているように思えてくる。

「私は……妊娠するための行為をしたことがありませんので……」

「したことが……ない……」

ゴクリ、と殿下の喉が鳴ったような気がした。

そつと顎に手を添えられ、上を向かされる。

どういうことだ、と問い詰めるような視線で、殿下の青い瞳にじつと見つめられた。

「では妊娠したという話は、どこから……？」

「妊娠したフリを……しました……」

私の言葉を聞いた殿下が怪訝そうに私の顔を覗きこむ。

「……なぜ、そんなことを……」

「皆に……私が妊娠していると思っただけからです」

そうすれば殿下は愛する人を側室に迎えることができるから、と続けようとした私の言葉は、普段よりも険しい殿下の声で遮られた。

「そんなフリをしてまで、周りの者に妊娠していると思わせたかったのか！」

柔らかいベッドに背中から押し倒された。逃れようとしても逃れられず、私の両手首は殿下の手で掴まれてベッドへ縫いつけられるように押さえこまれた。

「俺の望みはもう叶わないのだな……」

少し掠れた小さな声が耳に届く。絞り出すようにそう呟いた殿下は、まるで大切な宝物を壊されてしまった子どもが涙を堪えている時のような顔をしていた。

もしかしたら殿下は、私が側室を持たせたくないと考えてこのような噂を広めたと思ったのかもしれない。殿下の恋を応援しなかったのに、ふたりの仲を邪魔するために妊娠したフリをしたと思われてもおかしくない状況になっている。

側室を持たせたくないという私の願いを、勘違いとはいえ知ってしまったからには、殿下が私の思いを無下にするとは思えない。このままだと、殿下は私と添い遂げようとしてしまうはず。

でも、それならいつそのこと、子を授かるための行為をして本当に妊娠してから、改めて別の理由を殿下に伝えたほうが受け入れてもらえるのではないだろうか。

責任感で私と添い遂げる必要はない、私は国母になりたくて一時的に殿下の恋を邪魔しただけ

で、『妻』ではなく『子之母』だから、気にせずに特例を申請して愛する女性を側室に迎えてください、と。

私を組み伏せている殿下の顔を、まっすぐ見つめる。口を動かして出てきた言葉は、緊張のせいで少し震えてしまった。

「殿下……好きではない相手と子をなす行為をすることになりますが……殿下の子種を……私にいただけませんか」

「っ！」

突然、窓ガラスを揺らすような凄まじい雷鳴が轟き、私の手首を掴んでいた殿下の手にグツと力が込められる。

「痛っ……」

「あ、すまない！」

女性に痛い思いをさせたことなんて今までなかったに違いない。慌てたように殿下の手が私の手首から離れた。こんな風に殿下が動揺するのは初めて見た気がする。

「……ミーネ……本当に子種が欲しいのか」

「は、い……」

私の返事を聞いた殿下が、小さくため息を吐く。

「分かった……閨の知識は本で学んでいるけれど、実際に女性を抱くのは初めてだから、うまくできないと思うが……できるだけ優しくする」

殿下の手が私の頬に触れた。まるでガラス細工みたいな繊細なものを扱う時のように、そっと。その途端、胸が締めつけられたみたいに苦しくなった。

「優しく……しないで……」

「……え？」

「……優しくなんてしないでいいです。殿下、そんな風に触らないでください」

優しくされたら勘違いしてしまう。殿下に好かれているのではないかと。

そんな勘違いをしてしまったら、殿下が側室を迎えた時につらい思いをするだけ。

「そんな風に触らないで、だど？　なぜそんなことを言う？」

「私たちは体だけの関係なのですから」

「体、だけ……？」

切なくて苦しくて胸が張り裂けてしまいそうだけど、体だけの関係だと割り切ってお互いに納得すれば、殿下は私に気兼ねすることなく側室を迎えることができる。

「妊娠はしたいです。でも、私たちは体だけの関係です。子どもを授かっても、それは変わりませんから」

「そうか……」

シュル……と私の下着の紐が解かれ、夜着は着たままで脚の付け根が露わになったのが気配で分かった。

「俺とは、体だけ、か……」

殿下の手が私の脚を開くように両膝の裏をそれぞれ掴んだ。身体を固定されてしまつて動けない。

「は、い……、体だけ、です、殿下……」

好きな人と幸せになつてほしいから、束縛なんてしません……だから安心して、子をなすための行為をしてください。

心の中でそう考えながら殿下を見つめていると、殿下は眉をひそめて険しい表情をしていた。

「……分かった、肝に銘じておこう」

下着をつけていない無防備なところに熱くなった硬い杭のようなモノがあたり、ひゅつと息を呑んだ。いつもは宝石みたいに上品な雰囲気で輝いている殿下の青い瞳が、獲物を見つけた獐犴な獣のように熱く光つたような気がした。

「挿れるぞ」

殿下が私へ覆い被さってくる。今まで知らなかった殿下の重さを感じて困惑していると、先端がグ、と少し押しこまれた。

「い……」

思わず、痛い、と口から発しそうになり、シーツを掴みながら唇を噛んで必死に声を抑える。痛い、なんて殿下に知られてはいけない。

涙が出そうになり、堪えようとした……けれど堪えきれずに涙はこぼれ、反射的に、スン、と小さく涙をすすってしまった。そのかすかな音で、私に覆い被さっていた殿下がガバツと起き上がった。その顔は青褪めており、私と一瞬だけ目が合ったあとに俯いた殿下の声は、少しだけ震えて

いた。

「女性痛みを伴うと本で学んでいたのに……酷いことをしようとして、すまない……」

「殿下……大丈夫です。続けてください」

「……ダメだ。これ以上は、やめておこう」

ここでやめたらおそろくもう二度と機会を得られず、殿下は側室を迎えることができなくなってしまふ。

「やめないでください、殿下」

「……そんなに妊娠したいのか、ミーネ」

シーツを強く掴んだまま、コクリと首を縦に振る。

殿下は先ほどよりも険しい表情を見せて唇をギュツと結んでから、ためらいがちに口を開いた。

「それなら……少しでも痛みを和らげるように、ミーネの身体に触れ……解すことを許してもらえらるだろうか」

痛みを……？

ふと、ベルマリーが肩や背中を揉んでくれる時のことを思い出す。

「ミーネ様、勉強ばかりして身体がガチガチに固まっていますよ」と言つて、ベルマリーはよく私の身体を揉み解してくれる。

殿下に肩や背中を揉んでもらうなんて畏れ多いことだが、身体が解されて痛みが和らぎ、行為が続けてもらえるのならば委ねるべきだと思つた。でも本当に、こんな図々しいことを言つてもいい

のかしら……

「……お願い、します……。殿下、私を……、解して、ください……」

潤んだままの目で殿下を見つめ、戸惑いつつ言葉を発したら、呟いているみたいに小さな声になつてしまつた。

私を見て短く息を吐いた殿下の頬が心なしか赤い。熱でもあるのかと氣になったが、殿下は片手でご自分の目を隠すように覆つて上を向いてしまい、そしてなぜか数秒間じつと動かなかつた。

「殿下、体調が悪いのではありませんか？」

「体調は万全だから、心配は不要だ」

うつ伏せにならないと背中を揉んでもらうのは難しいので殿下へ背を向けようとしたけれど、寝返りをしようとする私の動きを殿下は右手だけで軽々と封じ、左手を私の右膝の裏へ添えて私の脚を開いた。そして私の両膝の間に座ると、仰向けになつて私を見おろしながら自分の指を二本、ペロリと舐めた。

その光景はなんとも言えない色気を帯びていて、蠱惑的な殿下の姿に驚き思わず目を逸らす。しかしその仕草が繰り返し脳裏に浮かび、身体の奥が切なく疼いた。こんな状態になつている自分がいたたまれなくて殿下を見られない。

「触るよ」

「あつ」

唾液で濡れた指でそこを突然ヌルリと撫でられ、腰が反射的に浮いた。

殿下に撫でられたのは両脚の中央にある小さな突起で、湯浴みの時にどのくらい力を入れて洗えばいいのかいつも困る場所。

まさかこんなに小さな突起を殿下に弄^{いじ}られるなんて思わなかった。

「今俺が触っている所をミーネは自分でよく見たことはあるか？　まるで小さな花の蕾^{つぼみ}みたいだ」
「ないで、すんつ、あ、んん」

小さな突起を優しく擦れたら変な声が出てしまった。声が漏れないよう、すぐに手で口を塞ぐ。
「ミーネ、声は聞かせて。どう感じているのか知りたい。手は、ここでも掴んでおいで」

手をとられ、殿下が着ているシャツに誘導された。シャツを握る手にギュツと力が入ってしまう。
再び突起を撫でられた拍子に、自分の声ではないような甘ったるい声が鼻から抜けた。

殿下の指の腹が私の小さな突起を這う。

「濡れてきた……陰核を触られると気持ちいい？」

まるで襦の間まで洗うように、くば、と広げながら、何度も何度も突起の上を殿下の指が滑る。

「ダメ……っ、あッ、んッ、いや……っ」

「こんなに濡れているのに嫌？　俺の手までぐしょぐしょだよ、ミーネ」

ちゅぷ、と音がして、身体のナカに何かが入ってきた。

「指一本でもキツイな」

「ゆ、び……？　ん……うう……」

圧迫感がすごい。きつくて痛みも感じる。それなのに、殿下の指が穴のナカの浅い所を擦った瞬

間、私の身体は快感のあまり大きく跳ねた。

「そ、こ、擦っ、ちゃ、ヤッ！」

「ここがいいのか、ミーネ？」

再び同じ所を擦られる。少しでも気が緩むとジュワツと何かがあふれそうだった。

「や、そこ、変な、ふッ」

「そうか、ここ、か」

私の身体のナカで殿下の指が動くたびに、くちゅ、ちゅぷ、と水音が聞こえる。その音は妙に官能的で耳の奥まで熱を帯びていくような感じがした。

「っ、あう、や、いや、あんっ」

「本当に嫌？　俺の指を奥まで咥^{くわ}えこもうと腰を揺らしてるけど」

殿下の指が、私のナカを刺激するのをやめてくれない。

気持ちよくて、気持ちよすぎて、つらい。

「あッんッ、んんッ、ああッ……！」

ググツと全身に力が入り、身体が大きく震え始めた。まるで痙攣^{けいれん}するみたいに身体が揺れてしまう。その揺れの波が過ぎると、途端に身体から力が抜けた。

上手に息ができなくて、ハッ、ハッ、と自分の荒い呼吸音が聞こえる。私の息はこんなにも乱れているのに、殿下の声はいつもと変わらない。

「もう少し脚を広げるよ」

下着をつけずに脚を開くのは普通なら絶対にできないような恥ずかしい体勢で、そんな姿を殿下に見られるなんて嫌に決まっている。

ただど身体に力が入らず、殿下の手でされるがままに脚を開いていくしかなかった。

先ほど先端だけ挿しこまれた殿下の身体の一部が、私のナカへ侵入しようとしている。

こんなにすごい入らない無理、と発してしまいそうな言葉を必死に呑みこんだ。

「……んん……ッ」

「痛みが和らぐように陰核を触るから。なるべく気持ちのいいほうに意識を向けていてくれ」

「ん、わかりつ、あッん……っ」

私の返事が終わる前に、殿下の親指で突起を撫でられ、吐息が漏れた。

その直後、殿下の腰が少し押しこまれる。尋常ではないくらい圧迫感が強くて、ぐっと眉根を寄せて目を瞑ると、殿下の動きが止まった。

陰核だと殿下が言っていた場所を軽く押すように撫でられて、今まで以上に甘く媚びた声が私の口からこぼれていく。すると殿下が再び動き、腰を進めた。

その流れを何度か繰り返して、殿下が少しずつ少しずつ私のナカへ入ってくる。最初は動きを止めてくれたことに安心した。でも今は、止まってしまうのがもどかしい。

「とまっちゃ、や……」

堪らずそう呟くと、殿下が、クツと小さく呻く。次の瞬間、何かが切れたような感覚とともに人生で一番の激痛が走り、ほぼ同時に殿下と私の身体がピタリとくっついた。

ナカをぎゅうぎゅうに埋め尽くしている殿下のそれは圧迫感がすごくて、息が乱れ、自然と涙がこぼれていく。少し上半身を起こした殿下が、私の涙を指でそっと拭ってくれた。

「……泣かせてしまって、すまない」

「殿下……私のナカ、に、すべて、入れて、いただけたの、でしょうか」

まだ呼吸が乱れていて、うまく話せない。言葉が途切れ途切れになってしまった。

「ああ、ミーネ、これで全部ナカに入っている」

「嬉しい……これで殿下の子種を、いただけ、たの、ですね？」

私がそう言うと、殿下は戸惑ったように喉を詰まらせて視線を逸らし、再び私を見つめると申し訳なさそうに口を開いた。

「子種を出すには……、ここから激しく動かなければ、ならない」

「——激しく動く!？」

思わず目を見開いてしまった私を見て、少し困ったように殿下が微笑んでいる。優しく私の頭を撫で、唇が触れるだけのキスをした。

「ミーネの身体が馴染むまで、このままでいよう」

少し掠れた殿下の声が聞こえ、再び口づけが降ってくる。今度は唇が触れるだけではなく、そのまま舌を絡めてきたが、殿下の腰は動かない。挿入されていることに身体が慣れてきたのか、キスに没頭してしまっただけなのか分からないけれど、いつの間にか下腹部の圧迫感はなくなっていた。口に触れていた殿下の唇が、ゆっくりと離れていく。でもまたすぐに近づいてきて今度は首にキ

スをされた。だけど口づけだけでは終わらない。殿下の舌が私の首を撫でながら、時間をかけて耳の方向へ這っていく。

殿下が私の背中とベッドの間に手を差しこみ、私を力強く抱きしめた。私は首を舐められながら、殿下の象徴で身体の奥をじんわりと押されている。

「……殿、下……なにか、へ、ん、です……」

「変？　どんな風に？」

首に唇が触れたまま話すからくすぐったい。それに今まで誰にも侵入を許したことのない場所ですながっているせいか、言葉を交わすと身体の芯まで声が響く。

「殿下の、が、奥に、当たっ、て……」

「っ、大丈夫かミーネ、痛いのか？」

私の様子を気にした殿下が上半身を起こした拍子に、ナカを深く抉られた。

「んんっ痛く、ない……むし、ろ」

「むしろ？」

「奥、が、気持ち、いの」

そう言うなり、殿下の存在がグンツと一回り大きくなった。奥を強く押され、お尻がヒュツと浮くような快感が走る。

「おっきく、しちゃ、だめ……っ」

「くっ、ミー……ネ……」

眉根を寄せて苦しそうな表情で殿下が短く息を吐く。

「煽らないでくれ、理性が崩壊する」

額に汗を滲ませた殿下が少しだけ身体を揺らした。それだけなのに、殿下の先端が的確に私の最も奥を突いてくる。

「ひう、っ、そこ、や、んんっ」

「ここが、奥の気持ちいい場所か？」

殿下が腰を何度も押しつけてきた。接合部をピタリとくっつけたまま押しこまれているから、擦られるような痛みはない。官能的な刺激を与えられ続け、身体の内が悦びに震えた。

快楽に溺れてしまいそうで怖くなり、救いを求めるように殿下の顔のほうへ手を伸ばす。

そうしたらパクリと指を咥え、そのまま舐められた。指先から伝わってくる殿下の舌の感触は、生温かくて柔らかい。

「んう、ん……」

思わず声を漏らしながら悶えてしまう。すると私の身体の内にある太くて大きな存在が、さらにググツと硬くなった。

柔らかい舌と硬い男性器の異なる刺激を同時に与えられる。その強烈な感覚から逃れたくて挿しこまれた存在を抜こうと腰を動かした。

だけどそうすると、甘い刺激が返ってきて余計に気持ちいい。逃げようとしたはずなのに愉悦の波に翻弄されて戻れなくなってしまう。

おふたりの結婚式が終わり、ミーネ様に他の侍女が付いて着替えてもらっている間にラッドレン殿下へお茶を運んだ私は、その時に殿下から相談を受けた。

王太子の婚約者候補の令嬢を集めたお茶会で出会い、一方的に好きになって王家主導で婚約し、無理やり結婚させてしまった。そのうえ身体の相手までさせて純潔を奪ってしまうのは忍びない。だから夫となった自分を好きになり、身を任せてもいいと思ってくれるまでは手を出さずに待ちたい、そのために協力してくれないか、と。

ミーネ様を大切に想って我慢しようとする殿下の気持ちが嬉しかった。

私から見てもお互い好き同士なのは明らかだった。あつという間に想いを伝えあって仲睦まじい夫婦になるだろう。そう考えた私は殿下の望みを叶えるために協力し、微笑ましいふたりを見守ることにした。

あの時は、殿下とミーネ様の間に夜の行為がないのも数日くらいだと思っていたのだ。

でもまさか、何もないまま一年も経ってしまうなんて……

そんなことを悩みながらミーネ様が起きた時に飲むための果実水を厨房で用意していたら、後ろから声をかけられた。

「おはようございます、ベルマリー嬢」

淡々としているけれど芯のある聞き取りやすい声で、少し低音なのが心地よい。よく知っている好ましい声だから、見なくても誰か分かる。

振り返った所に立っていたのは、予想通りの人だった。

「タジェロン様、こんなに朝早くどうしたのですか」

銀色の前髪がサラリと眼鏡の上の縁にかかり、切れ長の目つきで端正な容貌ようぼうのタジェロン・チェスター様は、フレイツファルジュ王国第一宰相を務めるチェスター公爵のひとり息子で、第一宰相補佐でもある。

いずれタジェロン様自身も第一宰相の任に就くだろうと周囲からも期待されている方だ。すでに王太子殿下の片腕として、さまざまな采配さいはいを振っていると聞いている。

そんな人がこんな朝早くに、しかも厨房へ来るなんて珍しい。

「一応お伝えしておいたほうが良いかと思ひまして。殿下が昨晚、視察の予定を早めて城に戻られています。一緒に戻ったネイブルから連絡がありました」

私の隣に立って話し始めたタジェロン様の上質な服を汚さないように気をつけながら、果実水を作る手は止めずにタジェロン様と会話を続けた。

「昨晚ですか？ 短い時間とはいえ雨がすごかったのに」

「雨には濡れずに済んだようですよ。予定を変更したのは、おそらくあの件が原因かと」

厨房内の少し離れた所に人がいるため、タジェロン様が『あの件』の詳細を述べることはないが、それだけで私には伝わった。その件でタジェロン様にお力添えをいただいたのだから。

「先日は何かとお手数をおかけして申し訳ございませんでした」

「あのくらい別に構いませんよ」

殿下が今回のアールガード辺境伯領視察に向かう数日前、ミーネ様から相談を受けた。

『妃に妊娠の兆候がある時は、性行為による母体の負担を減らすため、王室の男性は側室を持つことが可能』という特例を殿下に申請してもらうため、妊娠の『フリ』をしたい、と。

どうやらミーネ様は、王太子殿下が自分と閨を共にしないのは他に好きな女性がいるからだと誤解しているらしい。

最初は妊娠のフリをしたいというミーネ様に反対しようと思っていた。殿下が側室に迎えたいと考えている女性なんていないし、殿下が好きなのはミーネ様だもの。でもそのことを私の口から伝えても、ミーネ様のことだから私が気を遣ってそんなことを言っていると考えてしまうはず。それにもしかしたら、妊娠のフリが殿下の心を揺さぶり、おふたりが気持ちを伝えあうきっかけにつながるかもしれない……

そんな風に期待して、私はミーネ様に協力することにした。

視察の予定を早めて帰ってきたということは、このあと殿下は朝の散歩の時にでもミーネ様に真実を問うつもりに違いない。

殿下がいらっしゃる時は、朝食後に王宮内の庭園を散歩するのが、おふたりの朝の日課だ。昨晩の雨が嘘のようにいい天気だし、庭園を歩きながらお互いの気持ちを伝えあえたら妊娠のフリも大成功だと思う。

手に持っていたものを作業台へ置き、感謝の気持ちをこめてタジェロン様に深々と頭を下げた。

「とても助かりました。本当にありがとうございます」

「突拍子もない話を聞いて正直あの時は驚きましたが……何か考えがあるのだろうと思い、自分に

できる範囲のことをしただけです」

側室の特例は、医師の診断を待たず、妊娠の兆候のみで認められてしまう。

数世代前のことになるが、フレイツファルジュ王国十四代目ビラヴィッド王は彼の妻リオーラ妃への愛が激しく、毎晩のように長時間夜伽の相手をさせた。そのせいで医師による妊娠の診断がつかずに、リオーラ妃のお腹の子が何度も流れてしまったと言われている。

だからリオーラ妃の実父でもある当時の第二宰相が、母体の負担を少しでも減らして無事に出産を迎えることができるよう、特に強く希望してこの特例を制定した。

この特例は娘のことを思う親心だろう。私情を挟んで職権乱用だ、と今の時代なら批判されそうな法律だ。

当時は今ほど特例の制定に厳しくなかったのか、それとも第二宰相の力がそれだけ強かったのか、妊娠の噂でも特例の適用を申請するのに有効な材料となる。

だけど私がいくら協力したところで、ミーネ様が妊娠しているという噂はそんなに早く広まらない。だからタジェロン様に協力をお願いすることにした。ミーネ様に言うと、「タジェロン様に迷惑をかけてしまう」と反対するのは分かっていたので内密に依頼した。

タジェロン様のおかげで、ミーネ様の妊娠の噂はあつという間に広まった。自分だけでなんとかしようとせずにお任せして本当によかったと思う。

「ふふ、いろいろと巧妙で驚きましたよ。タジェロン様は敵に回したくないですね」

タジェロン様は情報操作とか、大きな声で人に言えない仕事が得意そうだと前から思っていた。

依頼する時にそう言ったら「……貴女は正直すぎるところが玉に瑕きずですね」と苦笑いされてしまったけれど。

でもいくら私だって、他の人だったらそこまで正直には言わない。学園の生徒会で当時一緒に会計の仕事をしていたタジェロン様だから、ハッキリ意見を述べることができるのだ。

「まあでも、タジェロン様にこんなことを頼むなんて、酷かなとも思いましたが」

眉をピクリと動かしただジェロン様が、口の端を片方だけ上げてかすかに笑う。意地悪な笑みだが、清秀な顔立ちのせいで下品には見えなかった。

「本当に、貴女は人をよく見ていますね」

タジェロン様に直接聞いたことはもちろんないけれど、学園で一緒だった頃からミーネ様のことを慕っているのは彼を注意深く見ていれば分かる。でもミーネ様は、自分へ向けられる異性からの好意に対して鈍感でまったく気づいていない。

マナーとか教養、勉強については、ミーネ様は完璧だった。人に対する思いやりのある行動なども、ケンバート公爵から自然と教わって身につけているのだろう。

だけど教わったことのない恋愛については非常に疎い。恋や閨事ねやごじについても学園で詳しく教えられるに。

「貴女の優れた観察眼は侍女にしておくには惜しい。私と一緒に父のもとで働きませんか」

「いやですよ、タジェロン様と一緒に働くなんて。絶対にこき使われますもん」

ククツとタジェロン様が笑う。

「確かにその通りですね、こき使うのは私ではなくラッドレン殿下ですが。こき使われている私はしばらく城に泊まりこむことになりそうです」

そう言いながら軽く肩を竦すくめると、タジェロン様は去っていった。

タジェロン様は今回の視察に同行していない。城に残らないとできない仕事があるために断ったと聞いている。私の知る限りでも実際かなり働いていたと思う。そんな中、妊娠の噂を広める手伝いまでしてくれた。

それに王太子殿下もタジェロン様に負けず劣らず仕事熱心な方だから、殿下が戻ってきたということでタジェロン様はさらに忙しくなるに違いない。

少し気の毒になってきた……あとで美味しいお茶でも淹いれてさしあげようかしら。

「ベルマリー、貴女よくチェスター様と気軽に会話ができるわねえ。羨ましいけど私だったら緊張してしまって声が出せないわ」

タジェロン様の姿が見えなくなったタイミングで、侍女仲間のジェシカに話しかけられた。タジェロン様に興味はあっても近寄ることはできなかったようだ。

タジェロン様は一見すると冷たい印象があり、そのうえ毒舌な時もある。だからジェシカのように接点がない人にとっては近寄り難いと思う。

ただタジェロン様は小さなことによく気がついて、人の長所を褒めることもできる。学生時代はそのギャップが良いと言っている令嬢もたくさんいた。

褒めていたと言えば、教会や孤児院への寄付を募る慈善事業のためにミーネ様がクッキーを焼い

た時も、美味^{おい}しいと褒めていた。タジェロン様にしては珍しく優しい笑みを浮かべていて……ああでもそれは、ミーネ様の作ったクッキーだからだろうか。

そう考えたら、ツキンとなぜか胸が痛んだ。

「タジェロン様とは学園で一緒だったからね。さて、と。私はミーネ様の所へ行ってくるわ」

胸の痛みには気づかなかったことにして、私は爽やかな香りのする果実水が入った陶器のピッチャーを手に厨房をあとにした。

上質な赤い絨毯が敷かれた廊下を進み、王太子ご夫妻の寝室の扉をノックする。

ここは夫婦の寝室だけれど、いつもミーネ様がおひとりで寝ている部屋だ。

だから必ずミーネ様が返事をする……かと思ったら、扉を開けたのは王太子殿下だった。

何度もお会いしているが、殿下の秀麗な顔立ちには毎回目を奪われてしまう。宝石のように煌めく青い瞳と筋が通った理想的な形の鼻、そして優しげに微笑む唇が寸分の狂いもなく見事に配置され、どの角度から見ても整っている。

しかも背が高くてスタイルも良い。ミーネ様と同じような背丈の私は殿下の肩くらいの身長なので、話す時はいつも見上げている。背が高いので一見すると細身に感じるけれど、日々の鍛錬の成果で実は筋肉質なのも素晴らしいと思う。

おまけに今朝は息を呑むほどの色気が滲み出ており、耐性のない令嬢が見たら興奮のあまり失神してしまわないか心配になるくらいだ。ミーネ様への重すぎる愛情を拗^{こじ}らせている殿下の残念な一面を知っていてよかった。そのおかげで私は辛うじて冷静でいられる。

殿下は昨晚、この夫婦の寝室で過ごしたのかしら。この部屋で殿下が対応されるのは結婚してから初めてのことだったので、内心驚いた。

しかもミーネ様はまだ寝ているという。毎朝時間通りに起きる人なのに。

「朝食は、この部屋に用意してもらってもいいだろうか」

おふたりは普段、朝食を食堂でとっている。寝室で食事をするなんて、今日は朝から初めての出来事ばかりだ。心の中の動揺を外に出さないよう、努めて平静を装って返事をした。

「分かりました、冷製スープにパン、それと果物でよろしいでしょうか」

ミーネ様はまだ寝ているとのことだから、冷めて味が落ちてしまうものよりも最初から冷たいもののほうが良さそうだ。

「助かるよ、ありがとう」

「他に何かご希望はございますか」

「そうだな、果物にはイチゴを用意してもらいたい」

「かしこまりました」

ふふ、と小さく笑ってしまった。

イチゴはミーネ様が好んで食す果物だ。それを用意してもらいたいなんて、本当に殿下はミーネ様のことが大好きでいらっしやる。

果実水が入った陶器のピッチャーを寝室の扉のそばにあるテーブルへ置き、退出しようと歩きます。

とその時、殿下に小声で呼び止められた。

「すまない……洗い物をお願いしたいのだが」

殿下から差し出されたのは、真っ白いシーツ——ではなかった。白いけど何かのシミがある。それに、血の痕も。

思わず大声を上げそうになり、慌てて両手で口を押さえた。

（これは……ミーネ様の破瓜の血!?　とうとう本当の初夜を迎えられたのですね!!）

いろいろと殿下を問い質したいけれど、とりあえず落ち着こうと静かにゆっくり息をしながらシーツを受け取った。

おそらく寝ているミーネ様を起こさないよう、そっとシーツを交換したのだろう。前々から思っていたけれど、我が国の王太子殿下はけっこうなんでもひとりできる。

容姿も頭脳も性格も完璧で素晴らしい。それなのに色恋に関すること、特に配偶者が向ける好意に鈍感なのが残念だ。

「ベルマリ嬢は、知っていたんだろう?」

「え、何をですか?」

突然話題を振られて、反射的に問い返してしまった。

不敬な態度になってしまったけれど、学園に通っていた頃、生徒会の会長を務めていた殿下とはよく議論を交わした間柄だから多少の失礼は見逃してくれる。

「ミーネが、妊娠のフリをしていたこと」

「そう……ですね、相談にのっていましたから」

「妊娠のフリをしていたのは、妃の妊娠時に適用することができる特例が関係していると思っているが、どうだ?」

「おっしゃる通りです」

ミーネ様は殿下が自分と闇を共にしないのは他に好きな女性がいるからだと誤解し、妊娠のフリをすることでその女性を早く側室へ迎えられようと望んだ。

でもこうして無事に本当の初夜を終えることができたのだから、きつとふたりはお互いの気持ちを伝えあい、両想いだったと確認できたに違いない。

「あんな特例、もっと早く廃止しておくべきだったんだ。今まで適用されたことがなくて形骸化していたのだから」

「そうかもしれませんね……」

特例が制定される原因となったビラヴィッド王は、かなりの絶倫だったと伝わっている。けれど妻であるリオーラ妃を溺愛していたビラヴィッド王は、特例の制定後に妃が妊娠しても側室を迎えることは一切なかった。彼の絶倫はリオーラ妃に対してだけだったのだ。

妻を溺愛する王はビラヴィッド王だけではない。

フレイツファルジュ王国の王は一途な家系なのか、側室を持った王は今まで誰もいなかった。

今の国王陛下も、殿下が小さい頃に王妃様を亡くしてしまったけれど、亡き王妃様だけを愛していらっしやるから後妻を迎える話が一切出なかったくらいだし……

そんなことを考えていた私に、殿下の口から告げられたのは意外な言葉だった。

「ミーネが妊娠のフリをしてまで、実家へ戻り逢瀬を重ねたいほど好きな相手は誰なのかということも、ベルマリー嬢は聞いているのか？」

「……ん、実家？ 逢瀬を重ねたいほど好きな相手、とは？
いきなり話が飛んで戸惑ってしまった。

「えっと……直接ご本人から聞いたことは私もないのですが、ミーネ様の好きなお相手は殿下ですよ、だから本当の初夜を迎えられたのでしょうか？」

「それはない。好きではない相手……俺と子をなす行為をしても子種が欲しいと、ハッキリとミーネに言われた」

「ミーネ様がそんなことを……？」
「いたい、なぜ？」

確かにミーネ様から直接、王太子殿下のことが好きだと聞いたことは一度もない。だけどそれを見ていれば分かる。

毎朝の散歩の時だつて、殿下と手をつなぐだけで可愛らしく頬を染めて嬉しそうに微笑むくらい、ミーネ様は殿下のことが好きだもの。

「その様子だとミーネは実家へ戻りたいとだけ言つて、その理由まではベルマリー嬢にも伝えていないのか」

「理由、ですか……？」

いや、そもそも実家へ戻りたい、とは？ なぜ殿下はこのようなことを……？

私が動揺しているのが伝わったらしく、殿下は眉をひそめて私の顔を見つめた。

「『妃に妊娠の兆候がある時は、母体の安全を優先するため、実家にて長期静養することが可能』という特例は知っているよな？」

「はい」

ビラヴィッド王の時代に制定されたもうひとつの特例だ。

こちらの特例も、リオーラ妃の実父でもある当時の第二宰相が強く希望して制定した。

特例の制定後に、妊娠すると妻が実家へ帰ってしまうことを恐れた絶倫のビラヴィッド王は、夜伽を我慢してリオーラ妃の体調を第一に過ごしたという逸話が残っている。

「実家ならば少なくとも城にいるよりは自由があるし、好きな男と会う機会を作れる可能性がある。だからミーネは妊娠のフリをしたのだらう」

驚きすぎて何も言えなかった。ミーネ様と殿下の間で甚だしい勘違いが発生している。

「俺が予定より早く戻ったことで特例を申請できずフリが無駄に終わり、実際に子をなす道を選ぶほどミーネは思いつめていた。好きでもない俺に触れられる苦痛に耐えて妊娠することを望んでいたよ」

殿下は俯いて目を閉じ、額に手をやる。

「ミーネには、俺の子を宿してまで実家に戻って一緒にいたいと慕う男がいる。だからせめて体だけでもつなぎとめておきたいと、往生際の悪いことをしてしまった」

「……殿下、こちらはひとり掛けのソファになります。いくら大きめのサイズとはいえ、この座り方はいかがなものでしょう」

朝食の載ったテーブルの向こうに同じソファがもうひとつあるにもかかわらず、私は殿下の膝の上に座っていた。

結婚して初めて、夜から朝まで一緒に寝室で過ごした。それでも大事件なのに、私は殿下に横抱きにでもされているような状態で座っている。

ベッドから横抱きのまま連れてこられたから必然的にそうなってしまったけれど、ふたりの距離が近すぎてなんだか照れくさい。

「これなら俺が食べさせてあげることができて、ミーネは動く必要がない。昨日は痛い思いをしたから身体がつらいだろう？」

昨日は痛い思いを――

その言葉を聞いて昨晚の淫らな行為を思い出してしまい、沸騰したように顔が熱くなった。

「いえ……大丈夫、です……」

「本当に？　だいぶ無理をさせてしまったと思うが……」

「私……昨日の夜の記憶が、途中から、なくて……」

「ああ、絶頂を迎えて意識を失っていた」

絶頂……昨晚初めて経験したあの感覚のことかしら。

快楽で頭の中が蕩けて気持ちよすぎて、我慢できず何かが弾けたような感覚だった。

そのあとの記憶がない……

「殿下の子種は……ただけたのでしょうか……」

「いや、ミーネが気を失った時点で止めたから、妊娠に至る行為はしていない」

答えを聞いて胸が痛んだ。それなら子種はどうしたのだろう。もしかして他の誰かが……？

「殿下の子種は、私が寝ている間に別の……」

「子種は自分で処理して鎮めた」

「ご自分で……？」

他の女性よりはずつと良いが、自分でと言われると少し悲しい。殿下に私は必要ないと言われていたみたい聞こえる。もしかたそのような機会があるなら、どう処理するのか教えてもらって私が鎮めてあげたい。

そう提案してみようと思つて殿下の顔を見上げると、青い瞳が切なそうに私を見つめていた。

「……ミーネは、まだ妊娠したいと願っているのか？」

「妊娠……したいです」

「そうか……」

ぎゅ、と殿下に身体を抱きしめられ、驚きのあまり心臓がドキンと音を立てた。

私起きた時点ですでに着替えを終えていた殿下は、服装もいつも通りきちんとしている。それなのに私が今着ているのは、胸からお臍にかけて三か所のリボンを結ばいいだけの簡単に着られる^ねの服だ。昨晚着ていたのは肌の露出が少ないものだったから、朝食の用意と一緒にベルマリー

が着替えさせてくれたのだろう。私が寝ていたので起こさないように闇くらの服の中でも極力簡単に着せられる服を選んだのだと思う。

ただ、着るのと同じくらい簡単に脱げてしまいそうな服で落ち着かない。しかも生地が薄くて、胸の先端とか、他に比べて色の濃い所がうつすらと透けている。

それに長さは足首まで充分にあるのにリボンで留めてある所が少ないから、油断すると前が開いて太腿ふとももが見えてしまう。昨日殿下に脱がされた下着は見当たらず、つけていないから気をつけなければ。

「ミーネ、口を開けて」

パンをひと口の大きさにちぎると、殿下が私の口元へ持ってきた。

「殿下に食べさせていたくなんて畏れ多いです」

「まだ身体が怠怠くて本調子じゃないだろう？ 畏れ多いなんて、そんなこと気にしないでいいさ」優しい笑みを向けられて、私は戸惑いつつ口を開け、殿下の手から直接パンを食べる。

私が殿下の手からパンを食べるたびに殿下が嬉しそうに微笑んだ。殿下は優しいから、こうやって人のお世話をするのが好きなのかもしれない。

時間をかけてパンとスープを食べ終えると、今度はイチゴを口元に持ってきてくれた。

「ミーネが好きなイチゴだよ。食べるだろう？」

殿下が手にしている真っ赤な大粒のイチゴは美味おいしそうだけれど、とてもひと口では食べられそうにない。

「大きいですね。どうしましょう」

「フォークとナイフがないから切ることもできないし、このままかじってしまえばいいさ」

殿下はそう言う私の唇に真っ赤に熟したイチゴを近づけ、キスをするみたいに触れさせた。イチゴ特有の甘酸っぱい匂いがある。

口を開けて、と言うように、再び殿下がイチゴで唇に触れてきた。

小さくちぎったパンを食べさせてもらっていた時よりも大きく口を開けて、はしたない行為をしていることに背徳感を覚えながらイチゴをかじる。

こんな風に口を大きく開けて食べたのは初めてで、かじった瞬間、じゅるつと音を立ててしまった。

殿下がジッとこちらを見ている。行儀が悪くなって思われていたらどうしよう。

「ミーネ、美味おいしい？」

みずみずしい果汁が口の中いっぱい広がって、とても甘い。

「美味おいしいです」

「よかった。まだあるから、たくさん食べて」

差し出されるままにイチゴを口にする。気づいたら殿下の指が赤く染まっていた。

「申し訳ありません、殿下の手が果汁だらけになってしまいました」

「ああ、本当だ。ミーネ、俺のシャツの袖を捲かつてくれる？」

言われた通りにシャツの袖を捲かると、鍛えられた腕に浮かぶ血管が目に入った。

殿下は護ってもらおう側であるにもかかわらず、時間を見つけては騎士団の鍛錬に参加している。騎士のように鍛えられた殿下の腕を見たら、私の動きを軽々と封じた昨晚の力強さを思い出して直視することができなくなってしまった。視線をなるべく逸らしつつ、ドキドキしながらシャツを肘まで捲っていく。

「できました。ではすぐに誰か呼んで手洗い用の水を用意してもらいますね」

「人は呼ばないでくれ」

冷たく放たれたその言葉に驚いて顔を上げると、殿下と目が合った。

殿下が悪戯っぽく笑う。公の場では見せない、友人などの親しい人という時にだけ見せる表情だ。こんな顔を見せられると、自分は特別なのかと勘違いしそうで困る。

「このくらい舐めてしまえばいいさ」

殿下はわずかに視線を下げると、赤い果汁のついた指を舐めた。そして舐めながら、再びチラリと私のほうへ青い瞳を向ける。その瞬間、私の頬が、ボンッと火が点いたように熱くなった。

昨晚、私の敏感な突起に触れる直前も殿下が指を舐めていたのを思い出して、蠱惑的なしぐさから目が離せない。

でも、そのおかげで目の前のことに気がついた。

「殿下、手の甲の方から肘まで果汁が垂れそうです」

「肘？ ああ、確かに垂れそうだ」

肘を自分の顔に近づけようとしたところで、殿下の動きが止まる。

「自分の肘は舐めることができないんだね、知らなかったよ」

困ったように笑うと、殿下は私の顔を覗きこんだ。

「ミーネ、舐めて？」

「舐め——!？」

まさかそんなことを言われるとは思わず、口から変な声が出てしまった。

（……舐めて、だなんて、冗談だったりますか？）

チラ、と殿下を見ると目が合い、シて、というように肘を私の顔に少しだけ近づけてきた。

舌を出して、おずおずと殿下の肘につける。そのまま手首に向かって舌を這わせてイチゴの果汁を舐めると、吐息を漏らすように殿下が小さく呻いた。

もしかしたら腕に小さな傷があつて沁みただろうか。

痛くないか心配で、殿下の腕に舌を這わせたまま目だけで殿下を見つめる。すると殿下は少し苦しそうに、ハッと小さく息を吐いた。転んで痛みを我慢している子どもみたいに殿下の顔は赤く、目も少し潤んでいる。やはり腕に傷があつて痛いのだ。

慌てて口を離そうとしたけれど殿下が私の後頭部をおさえたので頭を上げられず、時々チラリと視線を向けて殿下の様子を確認しながら腕を舐め続けることしかできない。

「ひあ!？」

突然、身体の向きを変えられて殿下に後ろから抱きしめられた。ソファに座ったまま殿下が自身の左足をソファの座面へのせる。私の左脚を持ち上げるように動いたせいで、ガバッと私の股が開